

# 「子どもと学生と一緒に作り出す空間～劇団ポニーの事例から～」

1006021467 松藤彩加

## 1. はじめに

私は、児童文化研究部という部活に所属していた。そのため子どもたちに接する機会が多く、子どもたちの行動に興味があった。そして、部活の活動の中で特に注目したのは、『劇団ポニー』の公演である。この公演というのは、小学校に実際に劇団ポニーが行き、子どもたちに、影絵劇や人形劇や工作などを見せるというものである。

この時、この部活の部員たちが公演を見ている子どもたちの中に混じっている。この学生たちというのは、子どもが公演中に騒いだりしないように気をつけるといった、公演のお手伝いに来た人たちである。この子どもとお手伝いの学生が、10分間という短い公演の休憩時間中に様々な行動を共同で行っている。今回私は、その子どもと学生の作り出す空間に注目した。年齢の離れた子どもと学生が、いかに、どのようにコミュニケーションをとっていったのかを、3つの出来事をつかって見ていきたいと思う。

### ○撮影

日時・・・2008年8月 10:00～12:00

場所・・・K小学校内の講堂

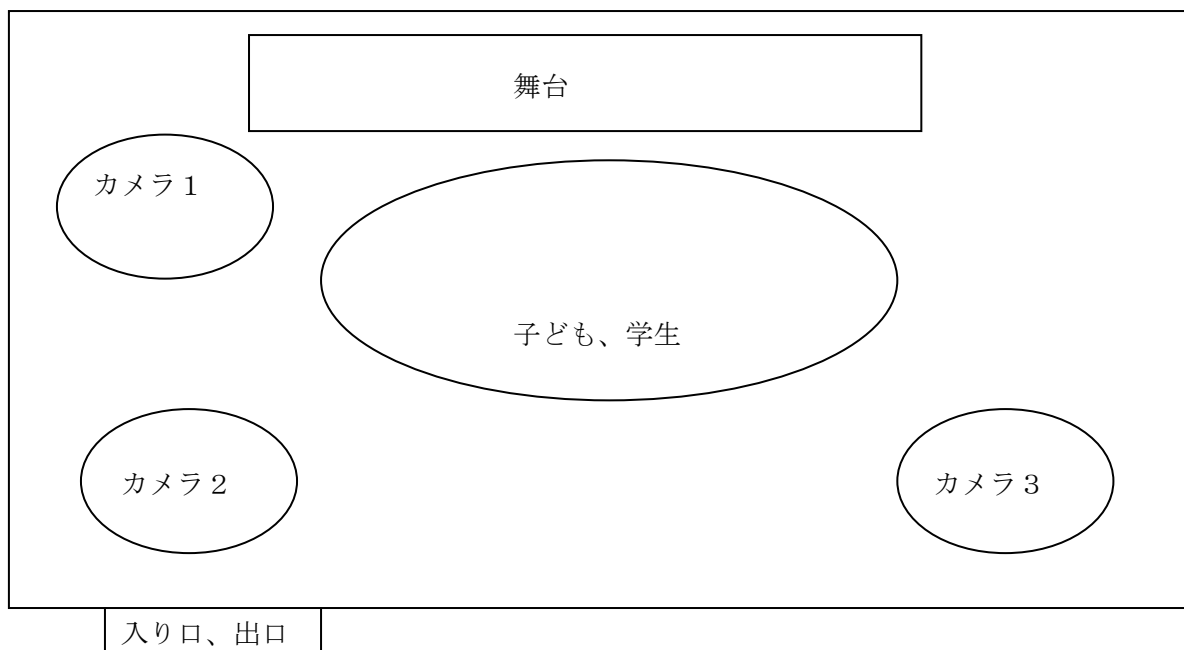
参加者・・・K小学校の児童、付属する幼稚園の園児たち、計30名

小学校の教諭12名、劇団ポニーの劇団員、児童文化研究部の学生

撮影器具、方法・・・カメラ3台（内業務用カメラ2台）、三脚3台、デジタルカメラ1台

講堂内に入って正面が舞台。講堂の右後ろ、左後ろに業務用カメラを、舞台の袖、左前にカメラを一台。

《図:公演中の講堂内とカメラの位置》



## 2. 休憩時間中の学生と子どもとの間の会話分析

以下に述べているのが、休憩時間中の二人の学生と子どもとの間にあった会話の内容である。ここでは、子どもを A とする。

この時は劇団ポニーの公演のなかにある 10 分間の休憩時間中で、前にあった工作時間中に作った万華鏡を見ていた子ども A に、メガネの学生 B が近づき会話をしているところに、手を伸ばしながら学生 C が入ってくるシーンである。(右後ろカメラ 30、11:06:12)

(写真1 子ども A と学生 B に近づく学生 C)



(万華鏡をのぞきながら前の黒板を見つめている子ども A に、カメラを持って近づく学生 B)

- 01 B: (ちらりと前の黒板を見てから、子どもに話しかける)
- 02 A: (Bに何か言っている)
- 03 B: . . . . . ポニョちゃう、劇団ポニョちゃう . . . . .
- 04 C: (体を A と B に向ける。子どもに腕を伸ばしながら近づいて行き) ポニョ!?
- 05 B: (Cの方に顔を向けて) 劇団ポニョいうてる
- 06 C: 劇団ポニョ! ?
- 07 B: (少し体をくねらせながら) ポーニョポーニョポニョ . . . (歌いながら)
- 08 C: (手をたたきながら) はっはっは、劇団ポニョって違うよ
- 09 A: (子どもがそれに対して手を使いながら答える)
- 10 C: うん、 . . . . . うん、
- 11 B: (A と C が喋っているときに、手に持つデジカメをいじる)
- 12 B: (デジカメを持って、B に近づき写真を撮ろうとする、もしくは B の顔の写真を撮った?)
- 13 C: 撮ってあげる
- 14 A: んじゃあ撮ってあげる
- 15 B: (B が C に持っていたカメラを手渡す)
- 16 C: ええーっ、二人で撮るよ
- 17 B: (カメラを C に渡して、A に並ぶ。そして C のカメラを見るよう促す)
- 18 C: はい、チーズ ん、可愛く撮れた  
(その後 3 人でカメラを覗き込み、先ほど撮った写真を見る)  
(A が自分の万華鏡を C に手渡し、代わりに C からカメラをもらう)
- 19 B: (三人が離れた後) 私が撮るの! ?私を! ?
- 20 A: (カメラを持ち、B と C を指差しながら) さっき映ったから私 . . .
- 21 B: え、うちも入るの? (自分を指差しながら)
- 22 C: はははっ . . .
- 23 B: うちも入るの?
- 24 C: じゃあ万華鏡はこっち、

ここから会話が聞き取れなくなる。

○学生 C が、A と B の会話に加わるきっかけとは？

ここで私が特に注意してみたのは、学生 C が子どもに話しかけるときである。

A と B が話し始めたすぐ後で、学生 C が二人の会話に加わっている。この時 C は、二人のところへまっすぐ向かっている。おそらく初めからここに行くつもりだったのだろう。

というところである。

ここでの C の動作は、

①A と B のところにまっすぐ向かってきている。

②自分の腕を子どもに伸ばしながら近づく

というものである。

まず①の A と B のところにまっすぐ向かってきている、というところでは、「まっすぐ」来ていることから、初めからこの二人に近づくという意味があったように読み取れる。

また②の自分の腕を子どもに伸ばしながら近づく、というところでは、子ども A が万華鏡を見ているところに、その万華鏡の位置に向かって手を伸ばしていることが分かる。これはおそらく、C は A の持っている万華鏡に手をかざすことで A の邪魔をするという「いたずら」をしようとしていたのだろう。そのいたずらをするので、A との会話をするきっかけを作ろうとしたのではなかろうか（今回は C が手をかざす前に A が万華鏡を下げてしまいいたずらはできなかったが）。

これらのことから学生 C は、初めから子どもに話しかける、もしくは A と B の会話の中に加わる意思があったことが読み取れるのではないだろうか。

その意思と動作のおかげで、学生 C は会話に加わるきっかけを自ら作り出していたと思われる。

しかしこのきっかけの要素は、他にもあるように思う。

それは、③学生 B の動きである。

ここで学生 B が行ったことは、学生 C がこちらに近づいてきた時、今どんな話をしていたのかを C に伝える、というものである。これは B が視線をはっきりと C に移していることから分かる。

B が近づいてきた C に、子ども A が「劇団ポニー」のことを「劇団ポニョ」と言っていると伝えることで、今二人がどんな話をしていたのかを C は知ることができ、そのまま劇団ポニョの話の中に加わっていった。

これらの3つがあったことで、C はより自然に会話の中に加わることはできたのではないだろうか。

このように、学生が子どもとの会話に加わる時には、入っていく学生の意思と、近くにいる学生の手助けがあって、子どもと学生の輪が形成されたように思われる。

### 3. 学生と子どもの追いかっこ、通せんぼ

この公演の休憩中には、ある子ども D と学生 E が追いかっこをしていた。

ここで注目したいのは、

#### ①追いかっこの始まり

子ども D と学生 E の追いかっこの始まりのきっかけは何だったのかを見ていきたいと思う。

#### ②追いかっこ中の通せんぼ

この追いかっこの最中に、その追いかっこに参加しているわけではない学生 F、G が、一度だけ走っている子どもの通せんぼをしていた。なぜ、どうやってこの F、G が子どもの通せんぼを行ったのか。

というこの二つである。

#### ①追いかっこの始まり

ここでは、子ども D が学生 E と追いかっこを始める瞬間を見ていきたいと思う。

(右後ろのカメラ 29、11:05:20)

(写真2 子ども D と学生 E の追いかっこが始まる直前)



- 01 1 1:0 5:2 0 (学生と一緒に万華鏡を見ている子ども D)
- 02 1 1:0 5:2 2 (学生の集団から抜け出す D)
- 03 1 1:0 5:2 3 (D を追いかけるように D の後を歩き出す学生 E)
- 04 1 1:0 5:2 8 (ずっと D の後ろをついていく E)
- 05 1 1:0 5:2 9 (突然走り出す D)
- 06 1 1:0 5:3 0 (両腕と片足を上げて、E の方を見ながら走る D D が腕と足を上げる  
のとほぼ同時に同じ動作を真似する E)
- 07 1 1:0 5:3 1 (もう一度、今度は反対の足を上げる動作をする D)
- 08 1 1:0 5:3 2 (E から逃げるように走り出す D)
- 09 1 1:0 5:3 3 (D を追いかける E 後ろを見ながら走る D)

○追いかけてこの始まりときっかけ

ここでは、私は二通りの読み方があると思っている。

### I. 子ども D がしかけた追いかけて

走り出した05:29のとき、D はちらりと E のことを見ながら動作をしていた。このことから、D は E が自分の後ろにずっとついてたことを知っていたのではないだろうか。

このカメラの05:20～05:28までの間で、D が後ろを振り返って E がついてきているのを確認しているシーンは見られなかった。しかし、前に設置していた別のカメラでは、D が一度だけ後ろを振り返って E の事を見ているシーンがあった。(前12、11:05:25) このことから、D は E の存在を認めており、このことが D が走り出すときのきっかけになったのではないだろうか。

またここで走り始めた瞬間に、D は特異な行動を突然している。この動作は追いかけてのはじめる重要な要因だと考えているが、その動作が始まると同時に、E も同じ動作を真似している。これも子ども D からではないだろうか。E の存在に気がついていた D は、自分が奇怪な動きをすることで、より自分の存在を E に認めさせ、結果追いかけてが始まったのではないだろうか。

### II. 学生 E が引き金となった追いかけて

学生 E の存在を気にしていたことは、上で述べたように明らかである。しかし、だからといって D が先にポーズをとり、追いかけてを始めたということも限らない。子ども D を明らかに追っていた E なので、自分の存在を気にして後ろを見てくれた D のことには気がついているだろう。なので、E は自分の存在に気付いていることを知り、あえて奇怪なポーズをすることで D の気を引き、それが引き金となって追いかけてに発展したのではないだろうか。

また、この学生 E は、追いかけてを始めてから休憩が終わるまでずっと追いかけてをしていたが、その時にいくつかの場面で、学生 E のみが自分から腕を広げたりなどの体を使ったポーズを取りながら子ども D を追いかけているシーンが見受けられた。このことから、学生 E が先に手を広げるポーズを取って子どもを追いかけたのではないかと予想される。

(写真3は、追いかけてしている映像の一つ)

(写真3 手を広げて子どもDを追いかける学生E)



しかしながらこの追いかっこの始まりの映像を見る限り、子どもDと学生Eのどちらが先に走り始めたのかは分からない。また、どちらが先にポーズを取り出したのかは、ほぼ同時に同じ動きを二人がしたこと、どちらが先に仕掛けたか、完璧に読み取ることはできない。

しかしいずれにせよ、子どもと学生がお互いに何も言わなくても追いかっこの始まりを読み取り、自然と始まったことから、この学生と子どもは二人の遊びの空間を自然と形成していたことがわかった。

お互いがお互いの振る舞いをモニターすることで、追いかっこの始まる秩序を作り出すことに成功したのだろう。



②追いかけてっこ中の通せんぼ

子ども D と学生 E が追いかけてっこを始めてからすぐ、通せんぼが始まる。

この追いかけてっこの途中で、追いかけてっこに参加していないと思われる学生 F、G が、子どもに通せんぼして邪魔をするシーンがある。(右後ろ、29)

(写真4 真ん中に立つ学生 F と学生 G)



- 01 1 1:0 5:3 3 (追いかけてっこをしている子ども D と学生 E 二人を見ている学生 F)
- 02 1 1:0 5:3 4 (学生 G も D と E を見る)
- 03 1 1:0 5:3 5 (D に向かって一歩踏み出す G G のところに走っていく D 自分の手を広げ、D を待つ G)
- 04 1 1:0 5:3 6 (D が G の目の前に走りこんでくる すかさず D の通せんぼをする G)
- 05 1 1:0 5:3 7 (G の通せんぼをすり抜けて走る D 目の前に来た D に自分の手を出して通せんぼをする F まだ手を広げながら、D の方に走っていく G)
- 06 1 1:0 5:3 8 (F の通せんぼもすり抜け、逃げる D 顔を見合わせて笑う F と G D の後を F の後ろから追いかける E)

(写真5 手を広げてDを待つG)



(写真6 Gに走ってくるD)



(写真7 Gの通せんぼを通り抜け、Dに向かって通せんぼをするF)



(写真8 DがFの通せんぼも通り抜けていく)



ここでは、まずは学生 G が通せんぼをした後、学生 F も通せんぼをしている。

○学生 F、G が通せんぼを行ったのはなぜか？

ビデオで見る限り、学生 G が通せんぼの格好をしたのは、D が自分の方に向かって走ってくるのを見てからである。D が自分の前に来る前に腕を上げて通せんぼの準備をしていたのに、走って逃げていた D はおそらく気付いたのだろう。しかしあえて止まったりいきなり方向を変えることはせず、G の通せんぼの近くまで来たときにそこは通れないと悟り、違うルートで逃げようとした。

この通せんぼを、D がやってほしいと言っていたという映像はないので、おそらく G が自分で考えて起こした行動だろう。しかしそれを嫌がることはせず、むしろ自分から通せんぼの G のところまでやってきた D は、その通せんぼという行為を楽しんでいたように見える。

また、G の通せんぼは自分のところから D が逃げた後もまだ終わっておらず、F が D に通せんぼをしている間も G 自ら移動し、D を通せんぼの格好をしながら追いかけている。

G から逃げた D を見ていた F も、同じように手を出して D の通せんぼをしようとした。

しかし、二人の通せんぼはこの一度だけであり、その後この追いかけてこに加わった様子はない。

子ども D の表情や、通せんぼだと分かっても逃げない行動などから、D はこの通せんぼをむしろ楽しんでたのは分かる。

いきなりこの通せんぼのアクションを起こした G、G と D のやり取りを見ながら自分も通せんぼを行った F。この二人は、子どもに何も言われなくても、子どもの動きを見て、どうすれば子ども D が喜ぶかを読み取り、それを実行したのではないだろうか。またこのような突然で一瞬の行動を起こすことで、自然と子どもとの遊びの空間を作り出したのではと思われる。

#### 4. まとめ

今までの事例を見てみると、休み時間中の学生と子ども達は、実に様々な空間を生み出していた。

まず 1 つ目の「子どもと学生との会話」では、自然な流れで大人と子どもという、年齢の違う三人の会話の空間をつくりだした。

2 つ目の「学生と子どもの追いかっこ」では、たまたま起こった現象から遊びに発展するという事態になった。

これは五十嵐論文の「砂場でこける→遊びになる」という行為に近いものがある。

この追いかっこでいう「たまたま起こったこと」とは、「学生が自分のことを気にしていることに、子どもが気付いた」ということと、「手を広げるという行為」である。そのたまたまが、追いかっこという秩序の立ち上がりである。そしてこのたまたまというのも、お互いにお互いの振る舞いをモニターしていたからこそ起こりえたことである。

これらが相互に相手を刺激し、秩序の相互反射的な生成を生み出し、「追いかける人」「逃げる人」という組み合わせが出来た。そこで、お互いに言葉を交さなくても、自然と追いかっこの秩序が生み出されたのである。

3 つ目の「学生の通せんぼ」でも、2 つ目の事例と似ているものがある。

ここでも、学生と子どもは会話を交すこともなく、ましてや通せんぼをしてくれ、というニュアンスの行動もなかった。しかし、学生二人は追いかっこの空間を瞬時に読み取り、子どもに通せんぼをすることで子どもと学生で、遊びの空間を作りだしていた。

五十嵐論文でも、子どもについての話、事例は出ていた。保育士と子どもとの関係は、今回の学生と子どもとの関係に非常に良く似ているように思われる。「子ども」と「大人」という関係である。

しかし、そのような関係でありながら、砂場の事例の「子ども同士」で作り出す遊びの空間と、今回の事例の「大人」である学生と「子ども」が作り出す遊びの空間が似ているというのは、果たして何を示すのだろうか。

これはつまり、子どもが作り上げる秩序というのは、大人と同じ観点で作りに上げている、というのとは別の話がある。

ここでの遊びの空間、遊びの秩序とは、大人と子どもという対比関係なく子どもが自ら作りだしているのである。

そして、対比関係のない中で、子どもと大人が一緒になって、同じ空間の中でお互いにお互いを認識しあって遊びの空間を作り上げていた。そこでは、大人のいう役割をもった学生、子どもという役割をもった子どもではなく、規範があったわけではなく、ただただお互いに共同で生み出した秩序が存在していただけである。

参考文献

「教育諸概念の実践の論理 ―教示、学習、知能、能力の社会的組織化―」

五十嵐素子（博士論文）2008年